



Title	『閑居友』と主体性：『発心集』との関わりに向けて
Author(s)	野本, 東生
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 162, 1(右)-18(右)
Issue Date	2021-02-26
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.162.r1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80583
Type	departmental bulletin paper
File Information	1004_bfhhs.162.r1.pdf



『閑居友』と主体性

——『発心集』との関わりに向けて——

野 本 東 生

一、『古今集』の例示

『閑居友』下一話は、山中に穀断ちして過ぐす尼が、夫を亡くしてすぐに全てを思い切つて出家したことを明かす、その心がけを話題の中心とする。後半には次の逸話が取りあげられる。

式部卿御子、閑院の五君に住みわたり給ひけるを、いくほどもあらで、御子みまかりにける時、かの住み給ひける帷のかたびらの紐に、昔の手にて、

かずかずに我を忘れぬものならば山の霞をあはれとは見よ

『閑居友』と主体性

と書きて、結び給へりけるは、あやしの身にわづかに伝へて見るだにも、春のあけほの、山の端霞み渡りて見ゆるには、すずろに思ひ出でられて、昔の情の忘れがたく侍るに、ましてかの五君の心の中、いかばかり春は殊に立ち迷ひて侍りけんと、あはれ也。

『閑居友』でいう傍線部「御子（みこ）」は「閑院の五君」ではなく式部卿親王を指す。そのことは五君の心中を推し量るに際し、春（＝毎春）に限定して残された者の立場を思いやる右の傍線部にも明らかであろう。しかし既に新大系等に指摘のあるように、これは引用元である『古今集』（哀傷・八五七）とは異なる記述である。

【式部卿のみこ閑院の五のみこにすみわたりけるを、いくばくもあらで女みこの身まかりにける時に、かのみこすみける帳のかたびらのひもに】ふみをゆひつたりけるをとりて見れば、むかしのてにてこのうたをなむかきつけたりける

かずかずに我をわすれぬものならば山の霞をあはれとは見よ

右に『古今集』を掲出した通り、亡くなったのは「女みこ」であつて式部卿親王ではないことがすぐに確認できる。一方で『古今集』を『閑居友』を見比べてみると、私に記号として引用本文に加えた【】の中では、波線部を付した箇所には差違が見つかる。しかし、「五のみこ」は「五君」と呼ばれ、「女みこ」は「御子」となる以外は、語順に変化がなく、尊敬語追加のほかは文言にも手が加えられていない。古今集諸本にも古注釈にも異同はないため、この変更は『閑居友』によるものと考えてよいだろう。さらにこの引用状況を踏まえれば、記憶に基づくものではなく『古今集』からの引き写しを強く想定されるため、この変更は意図的なかたちで行われたと見て誤りない。『古今集』におけ

る二人の「みこ」を『閑居友』では「御子」と「五君」に弁別する点もこの想定の一蓋然性を支える。であれば、このような意図的な変更がテキストにおいてどのような意味を有するのかを視野に入れなくてはならない。

それにしてもこの話は『古今集』を出典とするのだから、確認容易な内容である。もし、主張を支える根拠の逸話に誤謬・虚偽を認められてしまえば、その主張は致命的とも言える。確かに『古今集』のなかでは、「かずかず」の歌は古注釈や歌論書などにおいても言及されることが少なく、受容度合いが低いとはいえ、そこに不意な変化を見抜かれる危険性は少なくない。

「女みこ」から「御子」への変更は、語り手の誤謬であるのか改変であるのか、そして受け手がその変化を認知するか否か、さらにそれを語り手が想定しているか否か、問題はそこに強く関わってくる。一つ目の答えは語り手の改変であった。記憶のかけ違いによる誤謬の可能性はゼロではないが、これは二つ目の答えとも関わってくる。すでに注釈書に指摘されることを繰り返すことになるが、同話には次のような表現が見える。

まことに偕老同穴の契り、来ん世をひきかけて頼むるわざ、あらましなれど、罪深きことあまた聞こゆるぞかし。

唐土の御門は、「空をゆかば翼をならぶる鳥とならん」と契り、やまとの島の女は、「野とならば鶉となりて鳴き居らん」とかこてり。あるは「恋ひん涙の色ぞゆかしき」と思ひおき、或は、「なき床に寝ん君ぞ悲しき」とわづらへり。誠を致して弔はずは、浮かびがたくや侍らむ。つらつら思ひ続ければ、生けるほどは、いかなれば富士の高嶺にことよせて堪えぬ思ひをあらはし、清見が関をひきかけて袖の涙を知らするに、むなしく鳥辺野の煙と上り、いたづらに浅茅が原の露と消えぬるは、いたまらずもあるらん。

(下一話)

波線部はいずれも歌句の一節で『伊勢物語』（「野とならば」）、『後拾遺集』（「恋ひん涙の」）、『古今集』（「なき床に寝

ん」からの引用である。さらに掲出していない末尾近くの箇所にも、『後拾遺集』(「恨み重ねん」)、『古今集』(「逢ふに替へば」)を出典とする表現が用いられる。修辭の彩りとして和歌的表現を共有するというよりも、受け手に特定の具体的な和歌内容を共有することを前提にする態度がここにある。これらの多くはいずれも有名歌であるとはいえ、『後拾遺集』や『古今集』を当然想起されるべきテキストとして要求するわけである。貴人を受け手とする『閑居友』にあつて、ことさら受け手を限定せずとも、そのこと自体に特筆すべき事はない。けれども、歌句の一部から和歌全体、和歌の詠まれた経緯を想起するという要求されたリテラシーに従うなら、誰がどのような状況で歌を詠んだのかという問はそのまま、「かずかずに」の詠み手の問題につながる。したがって、語り手の誤謬は考えにくく、また受け手がこの変化を認知することは十分にあり得るということになる。

受け手がこの変化を認知するか否かという二つ目の点は、それを語り手が想定しているか否かという三つ目の点と隣り合わせである。「恋ひん涙の」歌が入集する『後拾遺集』(哀傷・五三六)の詞書きは次のようであつた。

一条院の御時皇后宮かくれたまひてのち帳のかたびらのひもにむすびつけられたるふみをみつけたりければ、うちにもご覧せさせよとおぼしがほにうたみつかきつけられたりけるなかに

死にゆく者がその愛人に歌を残すという枠組みのみならず、この傍線部に見える状況設定は、「かずかずに」歌と強い類似関係にあり、なおかつ「なき床に寝ん」歌は「かずかずに」歌と『古今集』配列上の隣接歌にあたる。数ある哀傷歌の中から選ばれたということを考えれば、このことは「かずかずに」歌への注意が向けられるような歌句引用といつて差し支えないだろう。とすれば、出典情報との差違に行き着くような示唆が備えられている、すなわちその差違を受け手が認知すると意図されていることになる。

二、改変と意向

こうして、問題は次の点に移る。なぜ改変したのかである。和歌の詠み手の改変は書き手の意向にとどまらず、受け手もこの変更を敏感に察知すべき性格のものであると言わねばならないのだから、なぜ改変したのかという語り手の意向を問うときには、この改変により受け手にどのような姿勢を求めているのかという問を同時に考えなければならぬ。改変の目的が改変の認知にあるとすれば、さらに次のように包括的に問を変えなければならない。改変の認知によって受け手に何を求めているのかということである。だが、残念ながらその追究は必ずしも十分には行えない。一つずつ確認しておこう。

五君の話題は例示の中でどのように機能しているのだろうか。前半の夫の死後に妻が出家する話題を受けて、後半では「偕老同穴の契り」が二世に及ぶことの罪深さが問題とされる。そこにいくつかの例示が伴って議論が進行していた。「生けるほどは露と消えぬる」に窺われるように、生きている間に必死に熱情や哀愁を伝えても、いつかは死んでしまうのだから胸が痛む、という評言にこれらの例示は呼応する。二世の契りを交わす男から女へのことば、二世に及ぶ愛執を自覚する女から男への和歌、死を自覚する臨終時の女から男への和歌二つが例示として挙がる。生前の約束・訴えと臨終時に途切れかかる思いが対応する。そこに五君の話題は、臨終時の男から女への和歌という形で、男女の双方向から発信される詩歌という補完がなされる。

これらの例示では、男女関係に関わる二世に及ぶ言及と、男女関係の途切れる臨終時の決定的タイミングを問題に

しながら、二世の契りを愛別離苦に搦めて、男女関係に関わる事象をまとめていた。必ずしも密接とは言えない二つの事象について、五君の話題はその例示本体と感懐の二つによって、愛執と愛別離苦の接続をすることになる。すなわち、死にゆく者の歌のみではなく、残された者への苦悩に寄り添うことで、死にゆく者の執着とそれに呼応する残された者の苦悩が押し出され、愛執と愛別離苦の問題が表裏一体であることを示すのであった。⁴

そこで改変によって何が変わったのかを考えよう。皇女が死んだ話は親王が死んだ話に変えられたことで、愛人に先立たれた者に女の立場が加わった。臨終時和歌の例示が対になり、また愛人に先立たれた者の振る舞いについても前半の話題と対になる。かたや出家をし、かたや苦悩から解放されずに生きる。すなわち、愛執と愛別離苦に関わる歌句例示をはさんで、残された者の対応を突きつけるのである。五君の話題は臨終時という和歌的文脈から離れて、愛人死後の身の処し方という時間的に下る部分を問題にするのであった。死後を見通した愛人への思いという例示を受けて五君の話題が据えられるが、これを批判的に捉えようとするのではない。「げにあはれに忍びがたき縁にこそあるらめかし」と避けられない宿命的的心情として人間の心情への理解を示すのである。末尾に据えられる「一たびははかなく、一たびはむざうなり」という把握は、人間の心情への理解と仏教的把握が同居する。⁵そして、その選択を受け手に委ねるように見せながら、一話単独ではなくテキスト全体として見れば仏教的把握への誘導を行っている。改変は愛人に先立たれた女という対が全体として効果を持つようになされていたのであった。

しかし、問題はこの改変が見抜かれるものであり、出来上がった対、抱かれた感懐が虚構として処理される恐れがあることだ。けれども、この改変の認知が織り込み済みであるならば、受け手に対して虚構ゆえに説得力を大きく失う事態よりも、改変を見抜く中に別の要求を探り出すように求められる事態を想定した方がよいだろう。むしろそれ

は捏造を事実として追認する要求とはならない。

作り上げられた虚像としての感懐であるという見方を翻すと、特定の条件の中に作り上げられた仮定的感懐という見方が可能になる。改変にふさわしい感懐を用意されれば、仮定的状況に対する具体的な実感は増す。改変を認知させることは、仮定を認知させることに他ならない。

前半の話題は確かに具体的だが、「よろづえかなはでのみぞやむめる」女の身の不自由さがありながら、女の身で出家したことに「思ひとりけん心のほど」が語られるだけで、愛執に囚われないという点には触れられない。後半の歌句例示は男女関係にまつわる普遍的な人間心情を示しながら、出家の決意に動揺を与えるものを提示する。出家の至徳といった類型化される観念的な問題としてではなく、それに動揺を与える例示を加えることで、受け手を実際的な思考と判断に巻き込み、実体的な「経験」を仮想させていくよう仕向ける。

末尾文「一たびははかなく、一たびはむざうなり」は、男女関係に関わる同じ事象を二様に把握したものであり、その先に実践的思考として選択を迫るものと言える。愛人の死後にいかに身を処すかという具体的な事柄であったが、男女関係の絆はいつか断ち切らねばならないということだから、愛別離苦をどう乗り越えるのが突きつけられる。そして、出家者ではない受け手を実際のな思考に巻き込むためには、死にゆく者の心情、残される者の心情のいずれをも想像させなければならない、ということなのだろう。語り手によってなされた仮定を、受け手も同様に行うことは、死者・生者の状況を可變的に代替しながら、その心情を落とし込むことそのものである。こうして、改変の認知は、それを意図として汲むことで、立場を可變的に想像することにつながり、受け手の主体性がおのずと立ち上がるように仕向けられるのである。情報は与えられるものではなく、自らの知識・「経験」として引き受けることに、

『閑居友』と主体性

その主体性は向く。⁽⁶⁾

三、『発心集』の介助

このようなあり方は、テキストの享受に暗黙に共有される外部テキストを関与させて化学反応を促すものである。下一話の理解では、『古今集』のリテラシーを前提として、受け手の主体性を要求する語り口を想定してみた。

例示の前提となった「恋ひん涙の」歌について、もう少し考えたい。恋や哀傷の和歌は仏教的把握につけば、避けるべき愛欲や執着として立ち現れることは想像に難くない。その理解は先行して『発心集』に見える。

又、近く蓮如と云ひし聖は、定子皇后宮の御歌、

夜もすがら契りし事を忘れずは恋ひん涙の色ぞゆかしき

と侍るは、かくれ給ひける時、御門に御覽せさせむためとおぼしくて、帳のかたびらのひみに結び給ひたりける歌なり、これを思ひ出だして、限りなくあはれに覚えければ、心にそみつ、此の歌を詠じては、泣く泣く尊勝陀羅尼をよみてぞ、後世をとぶらふ。又、詠めては、さきのごとく誦す。かくしつ、よもすがらまどろまずして、冬の夜を明かしたりける。いみじかりけるすき者なりかし。

(『発心集』卷六九)

死別にまつわる強い哀感はもっぱら和歌への感動を起点として生じており、その結果、哀悼にかかわる蓮如の行動を突き動かすことになる。和歌を起点とする行動原理に関わって蓮如には「すき者」という評価が下されるのであろう。一方でこのとき「後世をとぶらふ」のは、単にこの和歌の詠み手であるための特別視だけではなく、当然、和歌内容

や詠歌状況から定子を供養すべき対象と見なしたことに、理由があるだろう。すなわち、詠まれた和歌を、生者のありさまに思いを致してこの世に念を残したものと把握していることが理解される。

しかし、このような把握は他書に表立っては見えない。「恋ひん涙の」歌と愛執が結びつけられることが一般的であったかといえ、そうでもない。定子を罪深い存在と見なすことはあっても、それは『宝物集』巻五（九冊本）のように、出家後に懷妊したことを取りあげて、淫欲（不淫）を問題とする場合である。二世の契りと淫欲・愛欲とは同根にあるとはいえ、この歌との接続距離も近くない。『宝物集』（一卷本）でもこの歌が取り上げられるが、愛別離苦の例示として生者必滅・会者定離の中で説かれる。

『後拾遺集』を有力な出典とするこの歌は、残された歌三首のうちの一首で、自分の死を悼んでくれることへの期待を表にしながら、そのじつ二人の愛情の信頼関係を前提に帝へのいたわりを示そうと強がる歌であろう。「内にも御覽ぜさせとおぼし顔に」という詞書を右の波線部は継承したものであろうが、和歌が一首のみで掲出されれば、メッセージ性は突き上げられ、帝への訴えという側面が強まる。とすれば、愛執の念をとどめた和歌という把握も生まれやすい。語り手はこのような理解を『閑居友』に持ち込んだものと思われる。

また、『閑居友』下一話の「まことに偕老同穴の契り、来ん世をひきかけて頼むるわざ、あらましなれど、罪深きこととあまた聞こゆるぞかし」という部分に類似する文言として『発心集』五^⑦が指摘される。望夫石、悪靈化、楊貴妃の比翼連理、李夫人の反魂香の話などが例示としてひかれ、夫婦や男女の仲というものについて「かくの如く、世々生々、互ひにきはまりなくして生死のきづとならんことの、いと罪深く侍るなり」と述べられる。ほかにも「富士の嶺をひきかけ、海士の袖とかこちて、懇ろに心の底をあらはせど、（何のかひかはある）」という修辭的な説明も類

似する。これも同様に、語り手が『発心集』を通して『閑居友』に持ち込んだものといえるだろう。

これまで言われてきた通り、『閑居友』が『発心集』に触発されて成立していることは疑いないが、このことを受け手側に立ってみれば、下一話の一連の記述の理解は、『発心集』を経由すると受け入れやすいものとなっていることだ。そして、『閑居友』理解を『発心集』内容が後押しするという事態は、『発心集』が『閑居友』の読みを補完的に介助するテキストであることを示唆する。

たとえば、前半の話題は後半の話題との対によって、前半で出家した尼が称揚されるように展開される。愛人の死をきっかけにした出家がここで称揚される中身ではあるが、その機縁は「世中何にかはせん」という厭世的な感慨のみであって、必ずしも共有されて理解・想像できる感情とは限らない。むしろ、出家の機縁自体は『閑居友』全体としても様々に提示してはいるが、いま下一話と関連の深い『発心集』五二にある

立ち返り善知識とさとりて、かれを導かんことこそあらまほしく侍れ。

という考えを異なる選択肢として用意できるなら、下一話の理解は固定的ではなくなる。『発心集』は語り手が一話を構成する際に何かしらの先蹤となるだけではなく、こうした類似的な話題のつながりを通して受け手の理解を豊かにするようにも働きうるわけである。

四、『発心集』の位置づけ

さて、発心集には、伝記の中にある人々あまた見え侍るめれど、この書には、伝に載れる人をば入ることな

し。(中略)長明は、人の耳をも喜ばしめ、また結縁にもせむとてこそ、伝の中の人をも載せけんを、世の人のさやうには思はで侍るにならひて、かやうにも思ひ侍るなるべし。(上一話)

右は、『閑居友』の認識する『発心集』像を鏡にした『閑居友』自身の自己認識を端的に示したものである。⁽⁸⁾『発心集』を先蹤とする著述方法を批判的に継承した自己規定を露わにする。⁽⁹⁾だが、この規定が十分に機能するためには、基盤となる『発心集』について、受け手の理解が欠かせない。

さて、この僧都の事、発心集にも見え侍るめれど、この事は侍らざめれば、よきついでに因縁もほしく侍りて、書き侍りぬるなるべし。(上三話)

『発心集』との重複の有無について弁明するが、これを受け手に伝えることの意味は何なのか。語り手個人の書記行為に託した希望が記されるけれども、語り手が受け手に求めることは『発心集』との差違を理解してもらうことであり、それはすなわち受け手の中に『発心集』理解が備わっていることを前提条件に求めることである。上五話の晴海上人の話『拾遺往生伝』を挙げるが、しばしば引用なく言及される伝・遊心集もまた同様の位置づけにあると想像される。南筑紫上人を扱う上二三話では、同人を取りあげる『山外往生記』『発心集』などの内容とはやはり異なっており、他書に収載される人物であることを断る文言は含まれていないものの、事態は同様であろう。他書に書いてあることは載せないのとしたら、他書の情報は受け手自身で補うしかない。すなわち、他書との同話を持たないということは、情報の新規性を追求する書き手の問題だけではなく、不記載の情報を暗黙のものとする受け手の問題としても問われるということである。

また、この書き記せる奥どもに、いささか天竺・震旦・日域の昔の跡をひと筆など引き合はせたる事の侍るは、

「これを端にて知り初むる縁ともやなり侍らん」など思ひ給ひて、つかうまつれる也。

(上一話)

いわゆるヒトフデ說話について語り手は、傍線部のような期待を寄せるが、『閑居友』テキストを超えて、情報摂取に関わる受け手の積極的な関与を望んでいることになる。⁽¹⁰⁾

再び『発心集』に話題を戻せば、上三話の末尾に触れられる「あきはてぬればと嘆き、またはけがさじと誓ひ給ひけん心のうち」の「あきはてぬれば」「またはけがさじ」の玄賓歌句は、それぞれを他テキストに典故を求めることが不可能ではないものの、『発心集』からの引用ということは疑いないだろう。この二首が『発心集』という同一テキストに収まるという点や、さらに「けがさじ」については他テキストで「けがさん」という異同がある点から考えて、玄賓歌の知識は、歌集や歌論といった個別のテキストに基づいて共有される広い知識であったというよりは、『発心集』テキストを前提に得られる知識であるとするのが適切かと思われるからである。単独でこれらの歌句から内容を類推するのは難しい『閑居友』において、この二首が当然知りうる知識として扱われているのは、受け手の知識に『発心集』が含まれていると見なされるからだ、ということである。

『発心集』がなくとも『閑居友』は理解できるが、『発心集』があればその言い分をより理解できる。前節の繰り返しになるが、語り手による編纂行為においてはある種の対抗意識として『発心集』に目が向けられるが、表現上、構成上の土台として『発心集』が関与する中に、このような注視が受け手に共有されるように現れるのであれば、本文の受容にも『発心集』受容を絡めて考えないわけにはいかない。

下四話と『発心集』三十一は取り子の話題、養父母の死で類似し、上四話は『発心集』卷一の玄賓の出奔・弟子との再会の構成が空也で再現される面も伺える。⁽¹²⁾ 上一四話は卷六十二と、自然に心を慰められて憂悶の時がないという出

家者の発言に関して重なり、卷六12・13の郁芳門院の侍、上東門院の女房といった女院に関わる話は、下八話では建礼門院の話、女院本人の話として深まるようにも関連づけられる。

下九話は『発心集』卷四6を思い起こさせる。いずれも身体の不浄を覚知することで高僧の欲心が収まる、不浄観をめぐる逸話である。特に玄賓への言及に筆を惜しまない『閑居友』が『発心集』のこの玄賓話を想起したことは疑いないだろう。『発心集』との対比の中に『閑居友』が理解されるという事態は依然として想定可能である。

『発心集』四6の玄賓は観想を通して不浄の存在を見とおし、『往生要集』を借りて身体の不浄を記述する。一方、『閑居友』では、情をかけられた女房が、人間存在の不浄を「この身のありさま、臭く穢らはしき事、譬へていはんかたなし」と示した上で、個別具体的に我が身の不浄を示してみせる。

髪はそけ上がりて、鬼などのやうにて、あてやかなりし顔も、青く、黄に変はりて、足などもその色ともなく、いぶせく汚くて、血とどころ付きたる衣のあり香、まことに臭く、耐へがたきさまにて、さし出でてさめざめと泣きて、

右には姿を偽るのを止めて真の姿を晒そうとする女房が描かれる。この真の姿から示されるのは、身体が、死後の状態や理念的な理解に基づくような、未現前の不浄を抱えた存在なのではなく、より直接的に不浄の存在そのものであるということである。次のような同工異曲の類話における記述、

女人は上がるも下れるもあさましく不浄限りなき身にて候。御覽ぜよとて、かつらを取りて、此は死人の髪にて候なり。眉は桐木の灰をぬりて候ふなり、朱紅を付けて候ふなり。香は沈丁子麝香にて候と云ひて、皆洗ひ落としつ。七つ一重をぬぎすて、あさましくきたなげなる綴つづりを着つ、はらを□見せまゐらす。御室はつと…

(『説経才学抄』『諸聖教説釈』)

女人の美麗が偽りの姿であることを示して、そこから身体が内部に抱える不浄を想起させていく記述と比べると、『閑居友』が身体の不浄、人間存在の不浄をきわめて直接的に表現することがわかる。経年による容顔・身体の変質は、これを偽り隠すことの裏側で不浄観の認識を育てることになるというのである。『発心集』の玄賓のように理念的な方法によって悟るあり方と、下九話のように、他者によって悟らされるあり方、それと具体的に現実的な身体によって自ら悟るあり方があり、不浄観の認識を得る点から言えば、両者は補完的な形になっているとも言えるだろう。類似の話題が見えること、これを語り手ではなく受け手の問題として捉えれば、両者を引きつけることで、その差違を認識・自覚し、具体的に多様な相に受け手自ら直面し、方法的に「経験」として変換することだと言えるだろう。

下二話の遊女の話では、遊女が乗船するに際し、船主が拒否する。それは、

これはそれがしが候船なり。いかでか乗せ奉らん。さは知ろしめしたりや

(下二話)

否や、これは僧の御船なり。思ひたがへ給へるか

(『発心集』巻六10)

右のように、結縁のために遊女が少将聖の船に近寄ろうとする『発心集』巻六10⁽¹³⁾でも、船主の同じような対応を窺える。下二話は母親の追善供養の話でもあるが、遊女の出家譚である。遊女は、中納言顕基に捨てられてすぐに仏道修行に勤しむようになるから、出家の機縁は、直接的には顕基に捨てられたことではなく、最後にもう一度、顕基に縁をつないだことによる。そのように捉えると、『発心集』の話と構造的に近くなる。出家という結果に関しては両者に違いがあるものの、救済の手が及びにくいと見なされる遊女たちが、自ら縁を結ぼうという意志的に振る舞った話であり、『閑居友』ではより現実的な救済に近づいたものと見なせるであろう。

五、おわりに

『古今集』は表現上の問題、『発心集』の問題は類似の話題であつて、一見、この二つの問題は、外部テキストが要求されるという点でしかつながっていない。しかし、本稿で問題としたのは、外部テキストを前提としてその差違に目を向ける受け手の主体性の問題である。下一話の「かずかず」に歌に関わる差違の存在は、外部テキスト『古今集』の濃密な享受を前提とするものと見た。そしてまた、強く言明される『発心集』もまた、テキスト理解にあつて、要求されるものと見た。『閑居友』が閉鎖的なテキストであるがゆえに、語り手は受け手に望む関与を示唆できるのである。比較を強いて諸相を享受させることになる。

外部テキストとの比較を通して生じるのは、置換可能な主体・方法ということになろう。一書の中に類似する事例が集められてその同例に加わるよう受け手を巻き込んでいくあり方が往生伝や靈驗記であるとするなら、このように展開される各話に外部テキストを参与させて、受け手自身の在処・関わり方を探求させるあり方も当然に存在し得るはずで、いまここでは一般的な貴族の素養レベルからやや離れた『発心集』をその一つと見なし加えたのである。

類似の話題を暗黙に示唆しながら提示された説話素材に対して、置換可能な主体・方法に落とし込んで受け止める、これを『閑居友』テキストに対する主体的な方法と見なせば、このような受容の変形パターンを後続するテキストの中に観察することもできる。『閑居友』受容で知られる『撰集抄』を見てみよう。そこにおける

まことに妻男となれるならひ偕老同穴の契りこまやかに、来ん世を引きかけてたのむわざ不浅。彼のもろこしの

『閑居友』と主体性

御門の、空をかけらばつばさをならぶる鳥となり、地にすまば枝を連ぬる木とならんちぎり、此大和国には、うづらとなりて泣きをらんなんど聞こゆめる、げに罪深くたのむれども、死にて後は…（『撰集抄』巻二）

という文言は第一節にも掲出した『閑居友』に重なる部分である。田畑をうち捨てて出家をする点も同じである。『撰集抄』では男女が入れ替わり、愛人の後世を弔うことを前面に出す点で異なるが、『閑居友』下一話を意識する変奏と見なせる。同様の共有表現は他話にも見いだせる。ただし、『撰集抄』語り手側からは説話素材の案出に『閑居友』と的方法的合致が認められる部分があったとしても、『撰集抄』が受け手に対してその理解のために、『閑居友』を外部テキストと呼び寄せる構造を持っているか否かはまた別の問題である。これが創作であるかどうかという論点ではなく、『閑居友』下一話という回路を共有して、二つの説話素材が横並びに想定されるという『撰集抄』の受容を問題としたいということである。

『閑居友』を想起して説話素材を新たに加えて横並びにするという『撰集抄』の消化の仕方は、『発心集』を想起して提示された説話素材と横並びにする、という『閑居友』が受け手に求める姿に構造的に重なる。むしろ、受け手としての『撰集抄』に『発心集』想起が色濃いとは言えないけれども、『撰集抄』における説話創作は、語られる主体・方法を交換可能なものとして捉え直す営為として、『閑居友』が受け手に求める主体性につながるものとも見なせるのではないだろうか。

以上、外部テキストの参与を期待することによって、受け手に自律的・主体的な反応を求めるあり方を『閑居友』に見出し、受け手としての『撰集抄』がその期待に応える面を確認して傍証とした。そして、その参与を期待される外部テキストの一つとして『発心集』は言明されるのであった。

※本文引用の資料出典は以下に依った。なお、私意により一部、句読点、表記などを改めた箇所がある。『閑居友』：新日本古典文学大系、『古今集』『後拾遺集』：新編国歌大観、『発心集』：角川ソフィア文庫、『説経才学抄』：真福寺善本叢刊、『撰集抄』：小島孝之・浅見和彦編『撰集抄』（桜楓社）。

注

- (1) 原田行造「『閑居友』に投影された明恵上人の世界——上巻二話の成立と配列事情とをめぐって——」（『説話・物語論集』2、一九七三年）。
- (2) 青山克彌「『閑居友』の成立過程に関する一試論」（『説話・物語論集』1、一九七二年二月）は、引歌を縦横に用いた晦渋にして暗喩的・婉曲的な文体、叙情的な美辞麗句をつらねた構成的・装飾的な文体が、特定の読者（内親王）を牽引するための小道具として使用されると考える。
- (3) たとえば、『俊頼髓脳』には「聞くに罪深く聞ゆる歌」として、惟規臨終時の「都には恋しき人のあまたあれば」などの歌が挙げられる。
- (4) 小林保治『説話集の方法』（閑居友の世界）（笠間書院、一九九二年二月）は、いずれも偕老同穴の契の破綻的事例と見て、当事者達の遺恨のすさまじさから、罪深さをここに認め、尼の行為の正当さを立証・説得する試みと捉える。こうした文飾に伴い、説示性はいよいよ後退すると説明する。
- (5) 美濃部重克校注『閑居友』（中世の文学、三弥井書店、一九七四年二月）は、上二十一話の補注で、「むざう」が同情や憐憫の意となることについて「破戒無慙な者は悪趣に堕ちるべき将来をもっている」とされる所から、それに対する観察者の側の情意が派生し自立した結果である」と分析し、上二十一話や下一話にもこの本来的な意味を想起させるところを残すと指摘する。「はかなし」という人間存在の不定からくる頼りなさ、不安、定型的把握への同意に「むざう」という仏教的罪の存在を前提に置く、あわれみを見せることではある。「はかなし」という世俗の世界観と、「むざう」の仏教的世界観・価値観が並べられている。

『閑居友』と主体性

(6) 同様の議論になるが、「しのびがたき縁」が男女関係のことを指すのは一話全体から疑いのないはずだが、「恨み重ねん」の歌は道命が詠んだ惜別歌であって、本来的には関わりが無い。愛別離苦の一つと数えることもできるが、恋に命をかける熱情が現れる「あふにしかへば」という歌句が続くことを考えれば、一方通行の男女関係に類比して読むように要請されている。リテラシーの議論に沿えば、やはりその不備と見なされかねない例示であるけれども、惜別歌にも問題を波及させる仕組みと見ることもできる。

(7) 新大系脚注ほか。

(8) 野本「閑居友の結縁意識」(『東京大学国文学論集』6、二〇一一年三月)。

(9) 「世の人」と指しても多数派の反応であるとは限らないから、非難の文脈を過剰に読み込むことは慎重であってよい。

(10) ただし、関与を望むテキストについては、経典・経典注釈・漢籍をはじめとする漢字文のテキストとの間には、段階差が設けられているものと思われる。

(11) 藤島秀隆「『閑居友』の下巻部にあらわれた民俗性」(『説話・物語論集』1、一九七二年一二月)。

(12) 藤島秀隆「『閑居友』上巻第四話空也上人の説話をめぐって」(『説話・物語論集』2、一九七三年一〇月)。空也の逸話は『発心集』で別に存在する。

(13) 山部和喜『発心集新考』「神宮文庫本『発心集』の構成」「『発心集』受容の様相——『閑居友』の受け継いだもの——」(おうふう、二〇一二年五月)は、『発心集』の神宮本の配列が、出離の種々相を示す前半部と往生の業を示す後半部という組織体に分かれることを把握した上で、神宮本『発心集』の配列を『閑居友』が導入した、すなわち『閑居友』が参看した『発心集』は神宮本系統であったことを結論した。神宮本『発心集』と『閑居友』の人物配列の一致は両者を考える上で魅力的な論ではあるものの、検討を加えた例に見られるように『閑居友』が参看していたものは神宮本に収まらないと思われるため、ひとまず流布本(慶安版)を検討の材料としている。